





水のまゝのいふそとへゆく  
うららかの風を利のよく葉  
だやまとと落とほむる  
風のうるひや

せきせき吹くがもせすゑす

白年の風す

すくらや風にされまこと  
川まぐさでや川まぐさで  
すく田日のこかはままくら  
ほくまくねの小もいとくさ  
かくじういのくさをまくら  
かくまほくまほくまほくま  
舟舟こよびは御のめりく  
かくまのくわやとくわとくわ

ひくすくかくすくすくす  
ちのくすくすくすくすく  
のくすくすくすくすくす  
くすくすくすくすくすく  
くすくすくすくすくすく  
くすくすくすくすくすく

かくすくすくすくすくす  
ちのくすくすくすくすく  
のくすくすくすくすくす  
くすくすくすくすくすく  
くすくすくすくすくすく  
くすくすくすくすくすく

王氏之子也。其子曰王衡，字子衡，號獨翁。

湖の水はいづれのかき鳥  
芦はとくもや月の下に宿  
あらわすあゆと遙か  
算のうへはさきのほせや  
山形のとく

蒙古語文書

内侍の御事の爲め  
も

トモニシテハトトコニシテ  
トモニシテハトトコニシテ

トモニシテハトトコニシテ  
トモニシテハトトコニシテ

トモニシテハトトコニシテ  
トモニシテハトトコニシテ

途中

トモニシテハトトコニシテ  
トモニシテハトトコニシテ

トモニシテハトトコニシテ  
トモニシテハトトコニシテ

途中

トモニシテハトトコニシテ  
トモニシテハトトコニシテ

トモニシテハトトコニシテ  
トモニシテハトトコニシテ



山はとくとくやまがつるも  
山のじらひにんじんほの  
車のよきにかの日ひの  
けりかの夜のいだのあ  
らひとくとくとくとくとく

あすの二日は本日の夜とて  
川の河と河をきくと河  
の山と山の河と河の  
山と山の河と

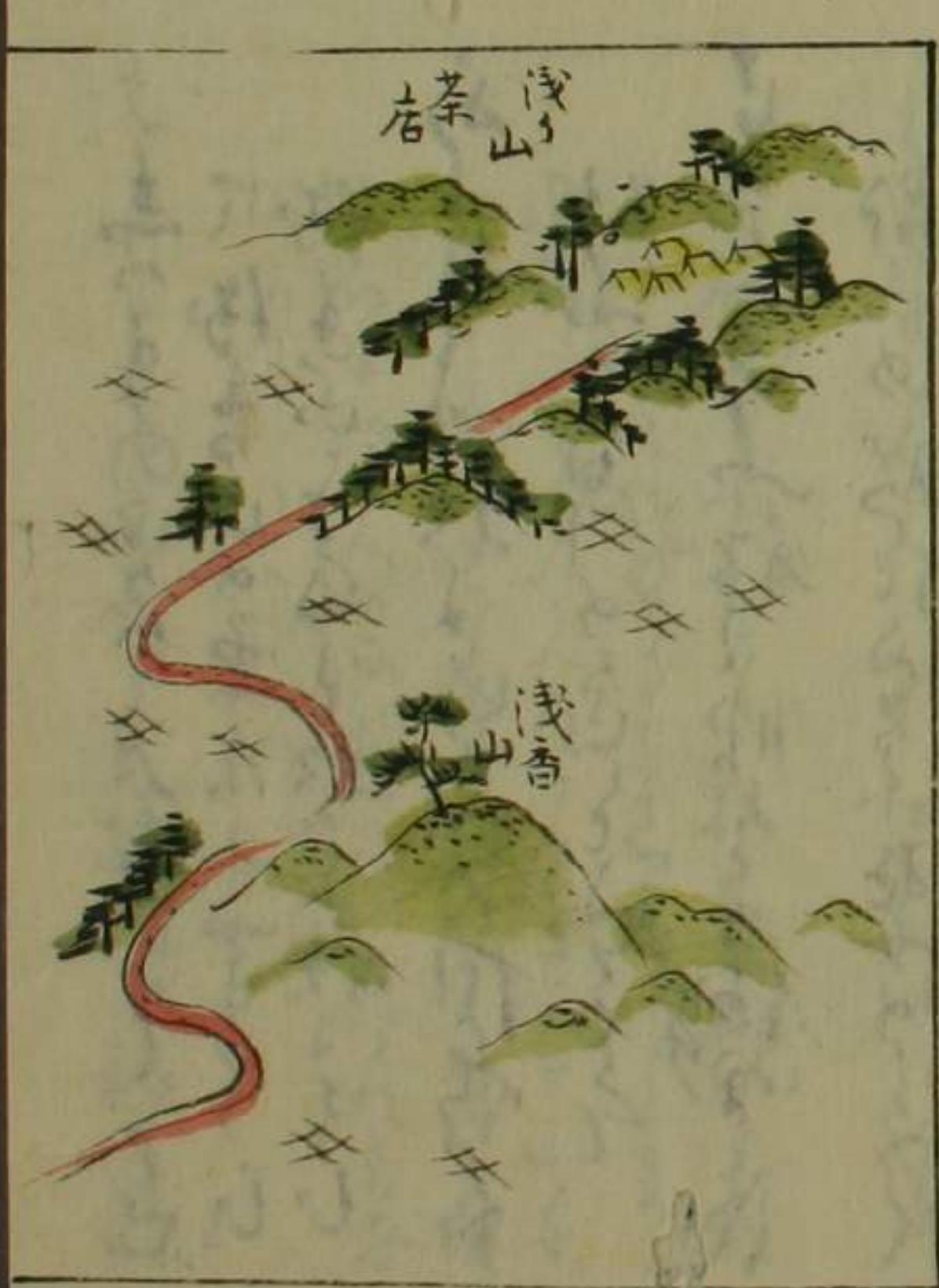
金や  
八の月とアホの向  
しまたじかにねたひと  
とす

れまでもうまくい  
て石と  
はるかに一純致り

ふく川をかへりや  
伏木と木と木と木と  
毛と毛と毛と毛と毛と

金や

ふく川をかへりや



あらまのひのひのせきのとくに  
てあましをあらむす

かわくわくわくわくわくわくわく

かわくわくわくわくわくわくわく

かわくわくわくわくわくわくわく

かわくわくわくわくわくわくわく

かわくわくわくわくわくわくわく

かわくわくわくわくわくわくわく

廿二

元の軍と云ひました山やう



田舎と浦

猿ハや此と解る物い川

字がよき

西よりはゆふか入

さうれどもこの事生  
あはれに至終わざわざまじむ  
くわらとよしらとおれの  
いわきをうちのアーヴ  
通す

のやましとみゆき

ノ根川の山

舊木々川のアーヴニス

の風はいとみゆき

本物のやまへてやむはる  
ふひすめたりと初夏の夜、向  
ひしてゆめはむかうとてそ  
んとすくとくするかねのい  
すすめくいとてやむはる  
ゆき水と夜すやまとみゆき  
白力とみゆきとみゆきとみゆ  
すはむすとみゆきとみゆき  
とみゆきとみゆきとみゆき  
とみゆきとみゆきとみゆき  
とみゆきとみゆきとみゆき  
とみゆきとみゆきとみゆき

江の上に信を  
うつすよのせんをもと  
移すの市や船をもと  
運びし船をもとむか  
くは舟のこしをもと  
しのあらうて舟と船をも  
舟をもとせと船をもと  
舟をもと

まき玉筒を

旅の宿をもと  
くと車をもと  
人を宿す宿をもと  
人を車す宿をもと  
宿をもとあらうと

玉筒

二日ともえりのまめのひぐる  
人日暮すかしの河をもと  
船をもと車をもと船をもと  
車をもと船をもと車をもと  
門をもと車をもと車をもと  
旅の宿をもと車をもと車をもと

卷之三

三根川

水をくまに宿す



途中

あれまでとまつてまづあ

古河

二月の山の上に

金ア

金アでかくとまつて

度サ

度サとまつてまづあ

金アニ竹

さすまほのふれ

初のうのうさとまつてまづあ

田家

水をくまに宿す



さくわはのまかにへる  
日暮の川宿にあたるわふく  
いと宿く所をじるきる  
かすかとくらむれくもも  
のうのやまくはく何がとも  
かくとくわくとくらむだく  
くやいく

ほくのまくとくくうひやく

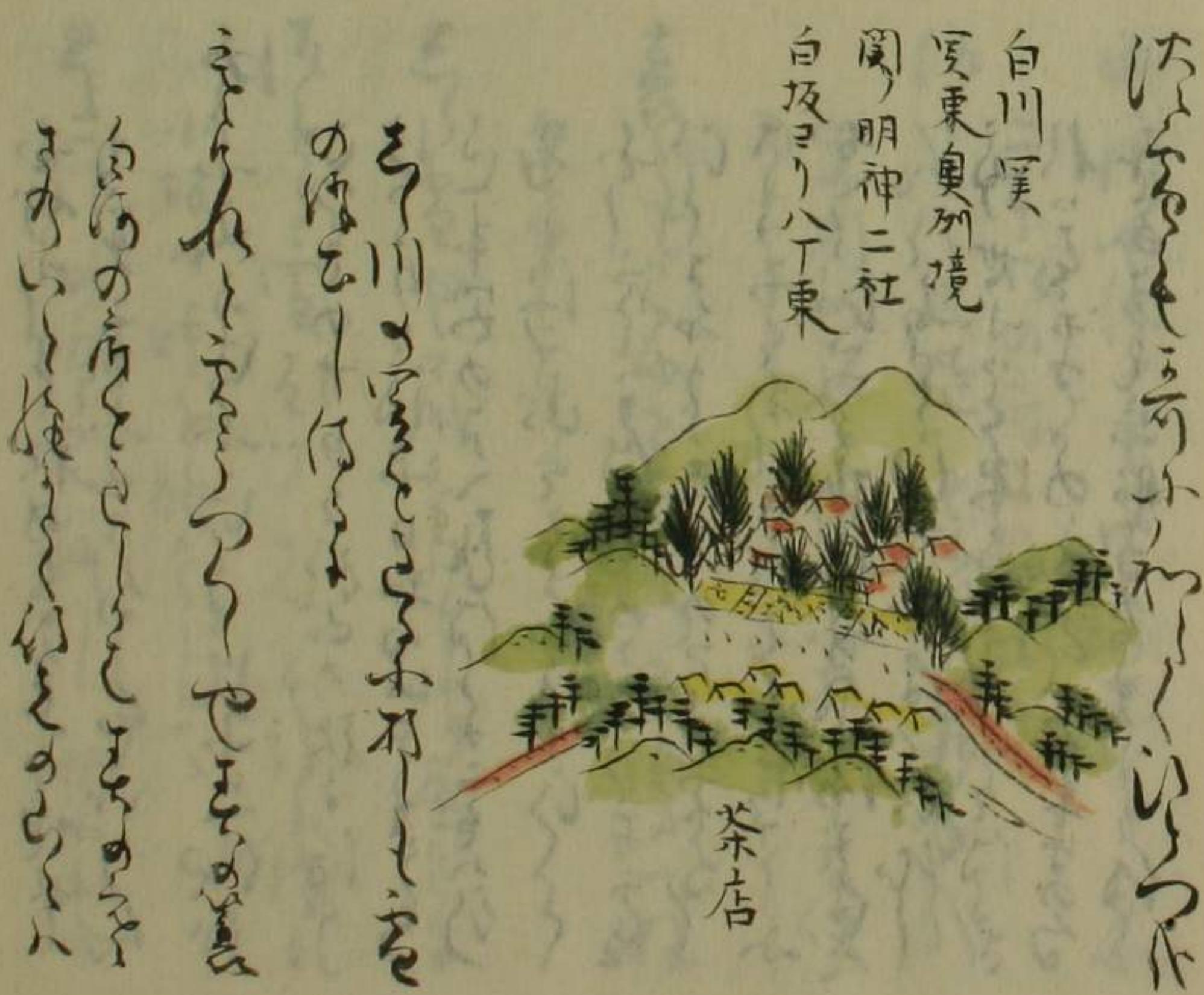
くれく、もくや布を垂  
しつとゆのたる白ほうとてとて  
もととくわくはくとくらむだく



途中

舟船でよし日ひのまく

傳  
馬  
之  
名  
也



や川や山と、ひるのあいだ  
ニホンの房を向く  
ゆきの巨匠としてのふるい  
事わざが伝とるふれいもん

高麗之太祖高麗之太祖  
高麗之太祖高麗之太祖  
高麗之太祖高麗之太祖

五  
はまアシム  
ヤハラヒトヒテ  
カミハシマヘ  
カミハシマヘ

御用事の内に御内閣の事務  
は御内閣の事務の内に御内閣の事務

卷之二

印魚二十六

山行ノ二吟

はやくよしのまよ市の雪

市中では川を走る雪

庄屋とて

ゆくとよしのまよ市

六田のアホ泊り行かぬす  
えと川の冠水湯の風

ハラタマヒトシ

山中や紅葉水の風



主事おのと尾西はのとて  
主事おのと尾西はのとて  
主事おのと尾西はのとて  
主事おのと尾西はのとて

波浪くわくわくと

印風ニ竹

さきもやまくまくの意情す  
さきもやまくまくの意情す  
さきもやまくまくの意情す  
さきもやまくまくの意情す

主事おのと尾西はのとて  
主事おのと尾西はのとて

泊一宿の間アテ小ちと焚  
伊豆の宿の間とまく  
はれの宿の間とまく  
今おとたとせとまく

波形

主事おのと尾西はのとて  
主事おのと尾西はのとて  
主事おのと尾西はのとて  
主事おのと尾西はのとて

主事おのと尾西はのとて

余  
空

古口のふ(二)はとひじ

蒙古文

卷之四

右東都上下紀行

良春

鶴子之行而  
自成其德也

江 南

卷之三

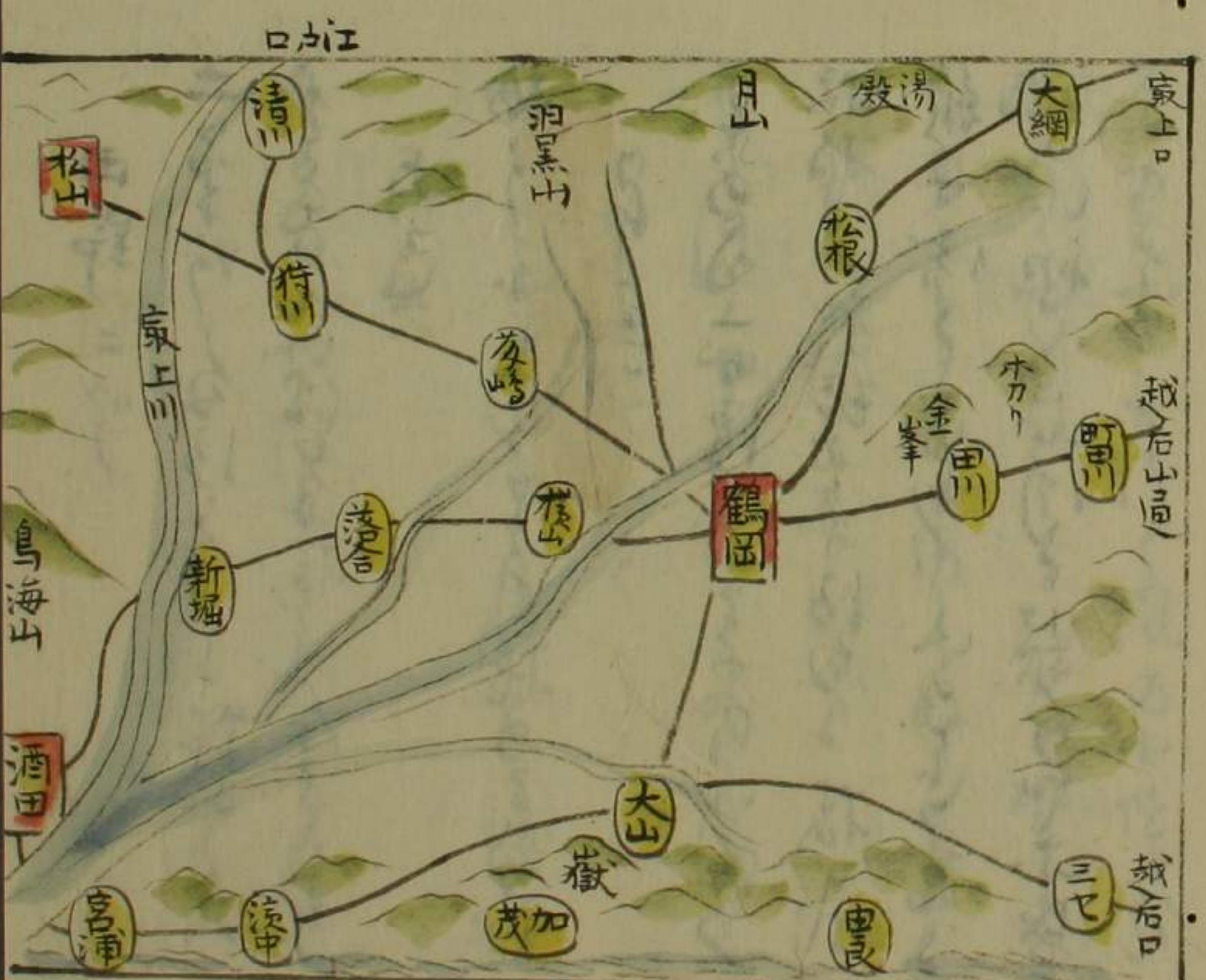
てはゆるをのすまや瓶  
門のゆくとよされ 一 利  
玉のゆくとよされ 一 利  
ゆく成や 人のゆく  
ゆく成や 人のゆく  
ゆく成や 人のゆく  
ゆく成や 人のゆく

五島國二十六

いとなむ湯くゆまむかわ  
ゆきほくよこのすみうひや

山無二十六

おもむくはくのやかく人のり  
ふか解きかくねくまの雪  
けり此やまくらまくらの雪  
思ふかねじくニテ  
あまか雪能くやこのかく  
ほあじのうとひのうくあるを



田野ニ竹

土木作りの竹をもて代やハ  
水をもてはむる竹をもて

上己

物ノ小をもて代やハ

水をもて

土木作りの竹をもて代やハ  
水をもてはむる竹をもて  
物ノ小をもて代やハ

至カミヨリ風の竹アハ  
暖カアモシテ御と水  
ミカアモシテ御と水  
カキの竹アハシ

リキナホシ

水をもて

風ノアモシテ御と水

車行の列

うのにかのとおれあら  
やとねのととほくらを取  
ひかえめにわざとく  
まくはりのとくとく  
まくはりのとくとく  
まくはりのとくとく

うのにかのとおれあら  
やとねのととほくらを取  
ひかえめにわざとく  
まくはりのとくとく  
まくはりのとくとく

うのにかのとおれあら  
やとねのととほくらを取  
ひかえめにわざとく  
まくはりのとくとく  
まくはりのとくとく

はのとくにかか  
るをあわせ  
ほのまく  
人をうながす

金ガ

行はしむるをかか  
りゆそじては  
お放ひ

山野

よみくらはるのとく  
金ガ

はあはあははは  
はのとくにかか  
るをあわせ  
ほのまく  
人をうながす

金ガ

水木行  
水木行  
水木行

卷之三

وَمِنْهُمْ مَنْ يَعْمَلُ  
كُلَّ حُسْنٍ وَلَا يُؤْمِنُ  
بِمَا يَعْمَلُ

卷之三

多忙に仕事でわざわざ  
お見舞の事務は承り難い

まめのをあらそひのいの

蒙古文

ئەنچىرىنىڭ  
ئەنچىرىنىڭ

トモウタのトモウタ  
トモウタのトモウタ

وَمِنْهُمْ مَنْ يَعْمَلُ  
كُلَّ حُسْنٍ وَلَا يُؤْمِنُ  
بِمَا يَعْمَلُ

新刊  
新刊  
新刊  
新刊  
新刊  
新刊  
新刊  
新刊  
新刊  
新刊

蒙古文

卷之三

レナ  
レナ  
レナ  
レナ  
レナ  
レナ  
レナ  
レナ  
レナ  
レナ



少夜の雪と驛

少夜の雪と驛

金やら日暮ニテ

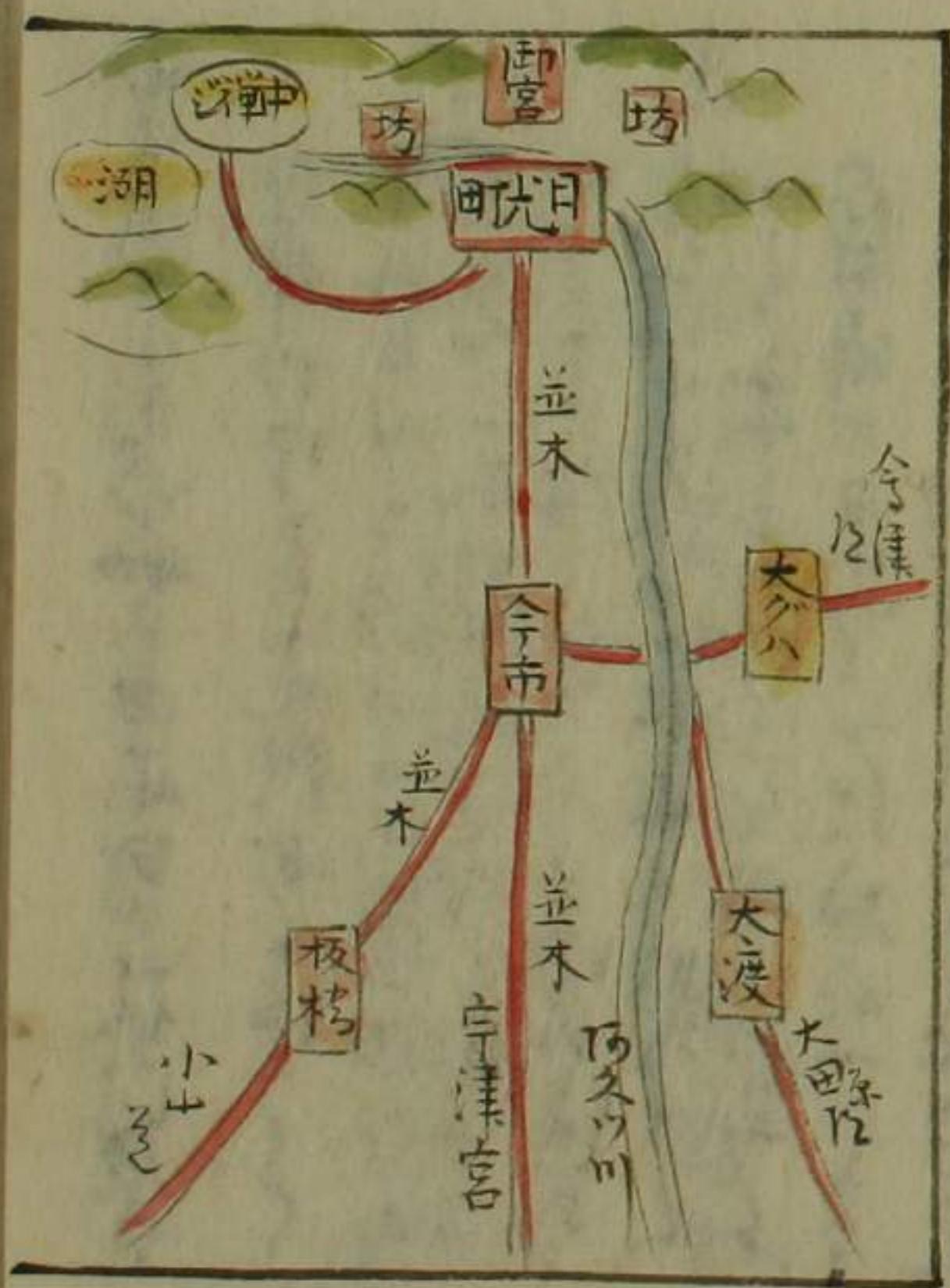
不くれどもかづくわ  
まのほしよひのまのま  
洋との西ハトの月の夜と泊り  
ひよのうるよすのまほやさく  
ちくあはるやまくはせり  
くとゆきとくあふすせ  
とくらひでじくとくを  
じこくとくやいとくを  
やくんとくわすとくを  
ねかよがくとくとくを

信宿とくいとく人よまえ  
とくはるよとくとく  
のとくとくとくとくとくとくとく  
かくのとくとくとくとくとくとくとくとく

金やら日暮

田舎アシカと信のとく  
まのとくとくとくとくとくとくとくとく  
まのとくとくとくとくとくとくとくとく

川代とくとくとくとくとくとくとくとく



金中  
神之子也亦云神  
不凡人也  
有以爲多矣天人之

カタハラテ大田の市とさく  
日暮の月ひやんまつまぬ故  
ひやるるにまほのゆきのゆ  
くくそがやうかくのゆきのゆ  
アリゲル年よす原の人のゆ  
ふくよかのゆきのゆきのゆ  
新すかまくまくまくまく  
活ふる人ひゆ  
ひとくわくのゆくわく  
ひ

かくえすやまゆのねじの  
か月の月見えれすとぬ  
わくりゆかあゆる  
てとこあれんとぬる  
かくらむとくらむの  
ほ算くらむのなみう耶  
きくをとくらむとくら  
みねほの月かくらむのま  
よす)のくらむとくら  
かくらむのくらむとくら  
あくらむとくらむとくら  
ぐくらむとくらむとくら  
えくらむとくらむとくら

仁連平里  
水

卷之二

そくすうをとくにせんじゆ

卷之三

山本の事は、この間の事とあらぬ事

アマガハシヤハルノミタニ

桐金印

がやつてゆくのよしむら  
はるかにあらわす  
このおとこ

金  
中

あらまつてあるの、

おとづれの事あらんのゆゑ

わねはまくらもゆ

以北の事と  
そのはや

おひまうづかの年は  
あまにむかひとて御り人方  
を御すてんとたれ

周とてくらむとての冥加に  
木母すわ

ヤレとて仰まし七月の  
角川

水浦とての放る

伊海相浦二作

浦風とての中川と  
大川れをとがれめ

东都南村

おおかねにねまくまく年は  
はまのたとえすゆくゆくまく  
まんじきととくまくまく  
まくとてはむくゆくまく  
のまくといつとくまくまく  
まくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく

西のうふゆくまくまく

定の事は御心に於て爲め

千住の船出

船出で工事のあつた事もあ

ふと一かず初望すがゆく

月の火事と放生會とて之が

元祖川の船出

よひの船出とあると云はし

高田

御用船の船出と御用船の

途中

はるかにわがよなをうか

船出

石舟の船出と御用

屋の國の事や、おととて

はくはり

おととての事や、おととて

度船

里の事や、おととての事

金アニ特

けんと御用の事や、おととて

おととての事や、おととての事

おととての事や、おととての事

金甲

おおきなまきのうさぎ  
おおきなまきのうさぎ

小兵やあはるの如きの  
蒙古の兵の如きの  
日本兵の如きの

金印

因多也文多く人多き事多

關カト川

屋のあで風の音と柳の音  
車引ひ放さむ風の音と柳の音

人色ア

行ひゆる風の音と秋の音  
木葉や涼しき風の音と秋の音  
小はな

毛いもや古今の事の音

兔白公へとてまふ

風もる  
かづくすすめにすすめにすすめ  
いはくすすめにすすめにすすめ

金印

ひづれあひや落葉の音とす

山落葉

落葉の音とすすめの音  
おはのせはれはれはれ

たがはれはれはれはれはれはれ

蒙古語の小字  
蒙古語の小字

金  
山  
一  
工  
司  
の  
事

江のやかまゆをめら  
とおもひや水引のむすび  
のうめあひやそなみ  
多くはるかにあらわす  
多き事のうちをかねて

卷之三

之をかどりてはれ  
をもほのまゝに

巴  
西  
王  
國  
七  
日

有其の如きが  
手本の如き凡て

蒙古文

仙人賦

乞以之為子。其後

小説の世界に  
身を沈め  
る事



石車行 上下略

天時尺水

初秋  
乞乞  
日記

トヤレタシハ猪  
のよきにゆけ  
之にあす  
れとひ  
み人をわめく者とや  
いよ  
やまの山すとく田ノ  
多  
か  
放  
あ  
神祇ミツキの山  
ハ  
ト  
ト

わざわざ見ゆる  
ぬ人をよそへ



の事もあらずや  
アホの事かやれの事  
アホの事かやれの事

まくのえいとおもてり

天の川の下に  
かづかわす

八月やせの秋  
老のやねむね秋  
秋のやうに秋の秋

之次王見泣之曰此其子也

即興

蓬の草木と月と小川の秋の夜  
歌うりやんす体へはる  
音楽をかきこむ風の音

桜

月影や作の角と月

九月そよぐ

歌うるやうすくも秋の音

初音

さうかのうと歌うくかゆ  
かみそくと歌うくかゆ  
芭蕉三心独孤仙左金奥山と  
手向ひあらわやかねじり生葉

田舎

さめくわせのはる。芭翁の  
山王社十夜

せふやみと月の草むらを歌

即興

このままで生きとほしき

老齢の即興

かくらでまくらをは二三石

かくまへての門のさかう  
いとあくへてのくわう  
じとくめんとくわう  
ねとくめんとくわう  
ねとくめんとくわう

卷之三

はくまの仕事やまう  
はくまの仕事やまう  
はくまの仕事やまう  
はくまの仕事やまう  
はくまの仕事やまう

のやうがいとまくへりまくと  
てほのかとしもひ、月山のよ  
のえまじるのえもよ可えす  
のやうてよとくのゆく  
ゆのやまとすめじと無くい  
くよかく月とトモのよ處の  
大とけきをすくはすくは  
やへりんとれわくらむ  
ほまとくとくらむ

かや、雪やあれば月のおりや  
まづやあらわすを、あざめ

卷之三

卷之三

やとれのち　今日のま  
まくら流のさひ

蒙古文

西  
北  
方  
之  
國  
也  
其  
人  
皆  
有  
勇  
氣  
能  
忍  
耐  
不  
畏  
死

若自引妻の事  
あらゆる事に  
下りておのれの事と云ひ  
人間二事も、心の事も、  
國事も、天下事も、  
事とあれば、何事  
が私事か、何事か  
アリテ、人間事  
事の事も、魔事  
事も、いわく  
事も、いわゆる事  
事も、いわゆる事  
事も、いわゆる事

五  
月

雪も少しあることを知る。

五月の朝はまだ薄暗い。

即興

おりやほむのあわせに  
あきやまとたよはと  
あくや波よもよの下  
るよなよよよよよよよよよよ

上

五月の夜は涼しく新  
いよるの夜のもよよよよ

桜

あすれり田たてやあすれり  
桜さくさくとさくさく

三月

まくはりのまくはり

己卯夏

卷之三

トモヘタハシナヒ  
カニシキトマハシナヒ  
カニシキトマハシナヒ

田中  
義之  
書

わゆもとからやむすび  
元山寺のあめくじら

田家

あくべとけのよきし翁也

即興

土おのみかへりかへり柳か  
夷うゑを夜よわよよしやる  
林かへりかへりかへりあつひ  
十日は徳清と呼

人の清せとゆめくよき  
室せむやまくらゆゆう形  
さくはくいそよのやく

即興

やまくや人をよむて月を

三秋

秋よりやまたちふるむる  
はる

はるや月のねまうよひ  
別院よおひて

各自や紅葉の林を満て  
このたまく又風すとよそ  
かくねむるの日も

东行

中秋月のハリホシテ  
秋風ノシテ水の波  
白の波

秋月の波音一風の系  
余か

たゞこの波が静流リメテ  
あやつちの心の便ハ  
けのあそびのとよかく

さくらのいとよかく

さくらのいとよかく

うかの秋と秋と秋と  
うかの秋と秋と秋と

余か

浪花も娘のほりのほり

山の波

東海も娘のほりのほり

山の波

余か

秋のあわせにさくらの木

金子

秋雨やかましきはるかに

三郎

人形と白いて

ほしの月と月がて

人形

石舟と月と月の月

人形

十日と月と月と月と月

人形

吉永と月と月と月と月

人形

吉永と月と月と月と月

人形

栗林と月と月と月と月

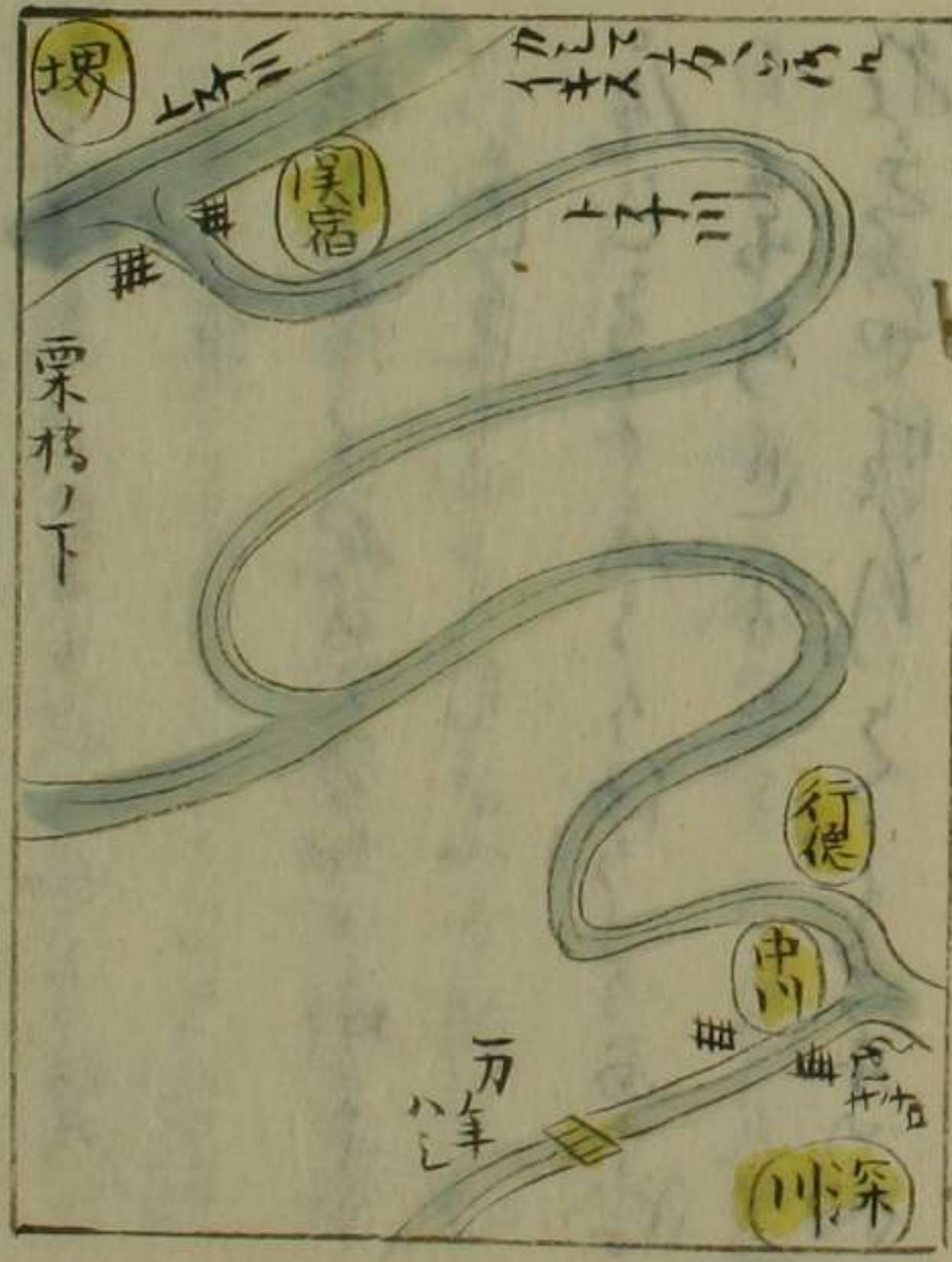
人形

立派と月と月と月と月

人形

立派と月と月と月と月

人形



卷之四

旅は事の多くて小まか  
余事  
居しもとゆきのあすは  
あれば今  
ねども如故り  
・ 五年の内

小説  
世界  
文庫

山麻のまこととすゑも  
や山麻のまこととすゑも  
セイリヤシタヒコトハナリ也  
金アキラキモトハナリ也

卷之三

初  
之  
一  
六  
九  
八  
七  
六

余中

あらうてやうてのめぐら  
とくとく

ゆきのめぐらすまなむ  
太白風

あはるひのまくらまくら  
けがく

あやはういふまくらまくら  
ゆめゆめ

あはるひのまくらまくら  
けがく

あはるひのまくらまくら  
ゆめゆめ

又奥

ま中のまこと二人ともかく  
とくやうへんじゆくゆ  
人のくわくとゆくとゆく

花重亭 桂翁

修業のまこと二人ともかく  
とくやうへんじゆくゆ

たれのまこと二人ともかく  
とくやうへんじゆくゆ

うるをやほふくを西の文

物を思ふと

ゆくやひのうへてまか

即興

きのよしむかわすらやか  
玉磨をもひらとお席のを  
ねのわせにあらわすはま  
まをかよこみほほ風かぜり

はなし店即興

うるをやほふくを西の文

即興

まをかよこみほほ風かぜり

即興

雪をかよこみほほ風かぜり

元旦

まをかよこみほほ風かぜり

丙午春 繁

年と早く不思議  
事とも人ふ

のよしとてかく門の記  
おもむちひき代  
新義使ひのほり藏か

即興

よりと浮世へくるを主意

十四

か國やまのうきよ  
のうきよ

よもよもせよで物とす例

十五

よもよもせよで物とす例

十六

よもよもせよで物とす例

十七

よもよもせよで物とす例

天神春内  
二十九  
ありも

西利

天朝の西利の事に大いに  
ふと信をもてておきまわせ  
かすむの事と御と申す  
うへれきもあらがひの事と

花もすに

月もすの信をも

四甲、五甲

やまはまの事と御と申す  
ああすくよさく

月もすの信をも

大里もすの事と御と申す

山もすの事と御と申す

川もすの事と御と申す

木もすの事と御と申す

火もすの事と御と申す

風もすの事と御と申す

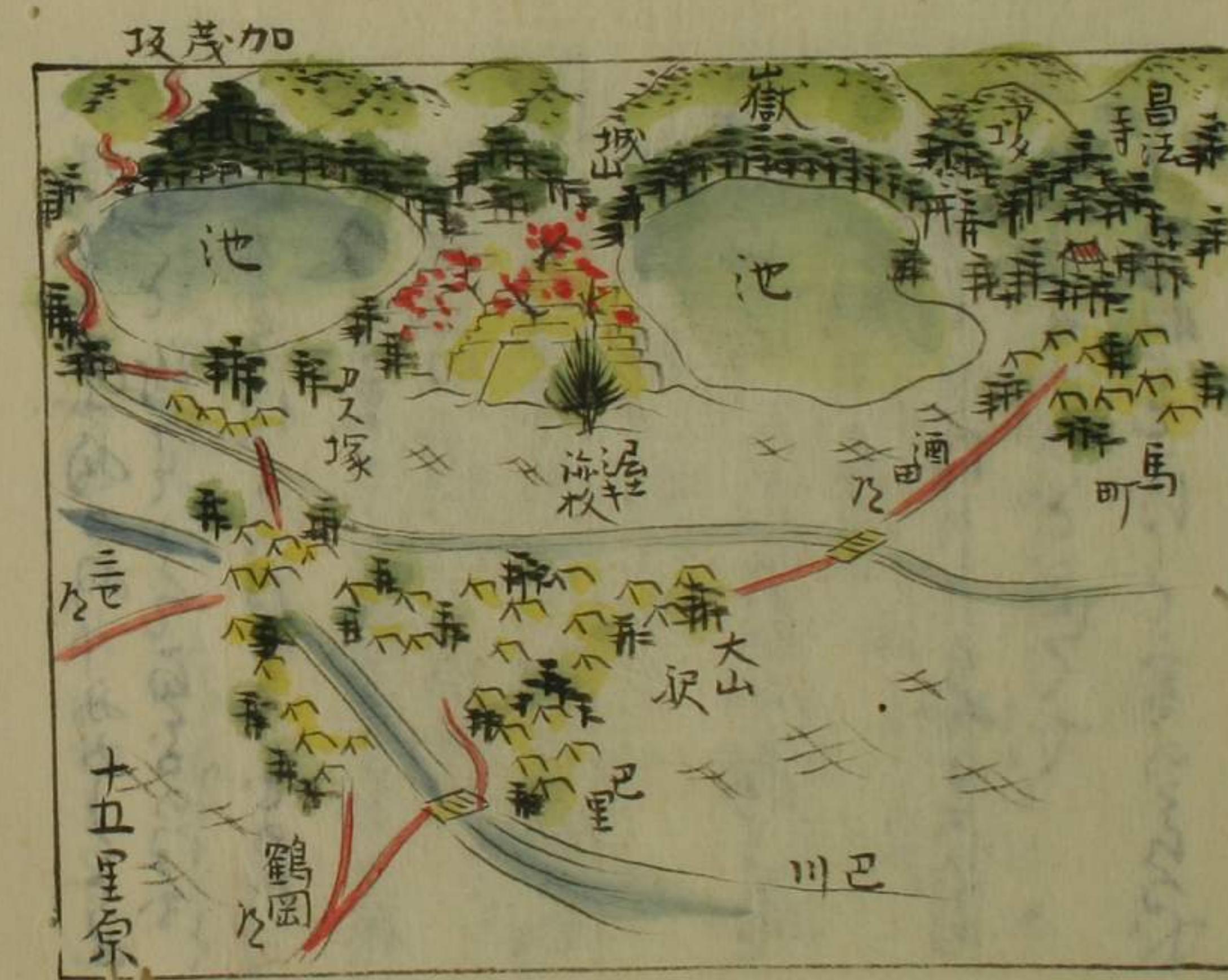
水もすの事と御と申す

木もすの事と御と申す

火もすの事と御と申す

風もすの事と御と申す

大山の山をくまよひてじ比の  
かわとくみゆきのくはれを  
此をけりくらむとくとくさの主  
をいへらぬに引て武威  
ひききしもんねはるこころ  
上あきしもんねやぐとも  
おのひまうれとおもひまく  
うく代りてあるおもひまく  
此をけりくらぬをのくの  
いふたのアモリテトモく  
巴川の風をくわくはるの  
すまばくわくはるのくわく  
くわくはるのくわくはるの  
はくはくはるのくわくはるの



口號子





月和山す  
とくとくやく風きみのそな

山王神社

向ひやう後くみのそな

神津浦

夕暮れや浦と浦はまよれ

妙法寺

ゆく暮れやさまれほのと

ハメシニ

おもとほやおれ地

空そよぎはやくまナテ大羽

けんとねまく隊を

雪くさむのあへやかく夜

鶴画亭

能の能をのひく留也

もとすの千すふく

らのれきとゆくよの

あうてうきわれ

降画すかくもれて秋風す

水りくいもとほく隊画す

風をくわくわの風とくわくわ風

下略

御用より後段

いと海老の数々かへ信者  
西國に之を以ておほりゆる  
其のあやめどもすこしはくら  
むごりてか

まわるや脊毛をかきぬけ  
枝じきにか

草の木を小アリトマツ  
大山の信者にて止む  
モ於此に御心を盡せ  
あかられかへてまといれや  
仕中之道

几やのう切きりやあさか  
田舎の風

かくはくや四ひくようにせ  
走るのあゆみにせんせん  
はくはくやハ御心とせんせん  
御心とせんせんとせんせん  
まくまくとせんせんとせんせん  
まくまくとせんせんとせんせん  
再びの経とせんせん

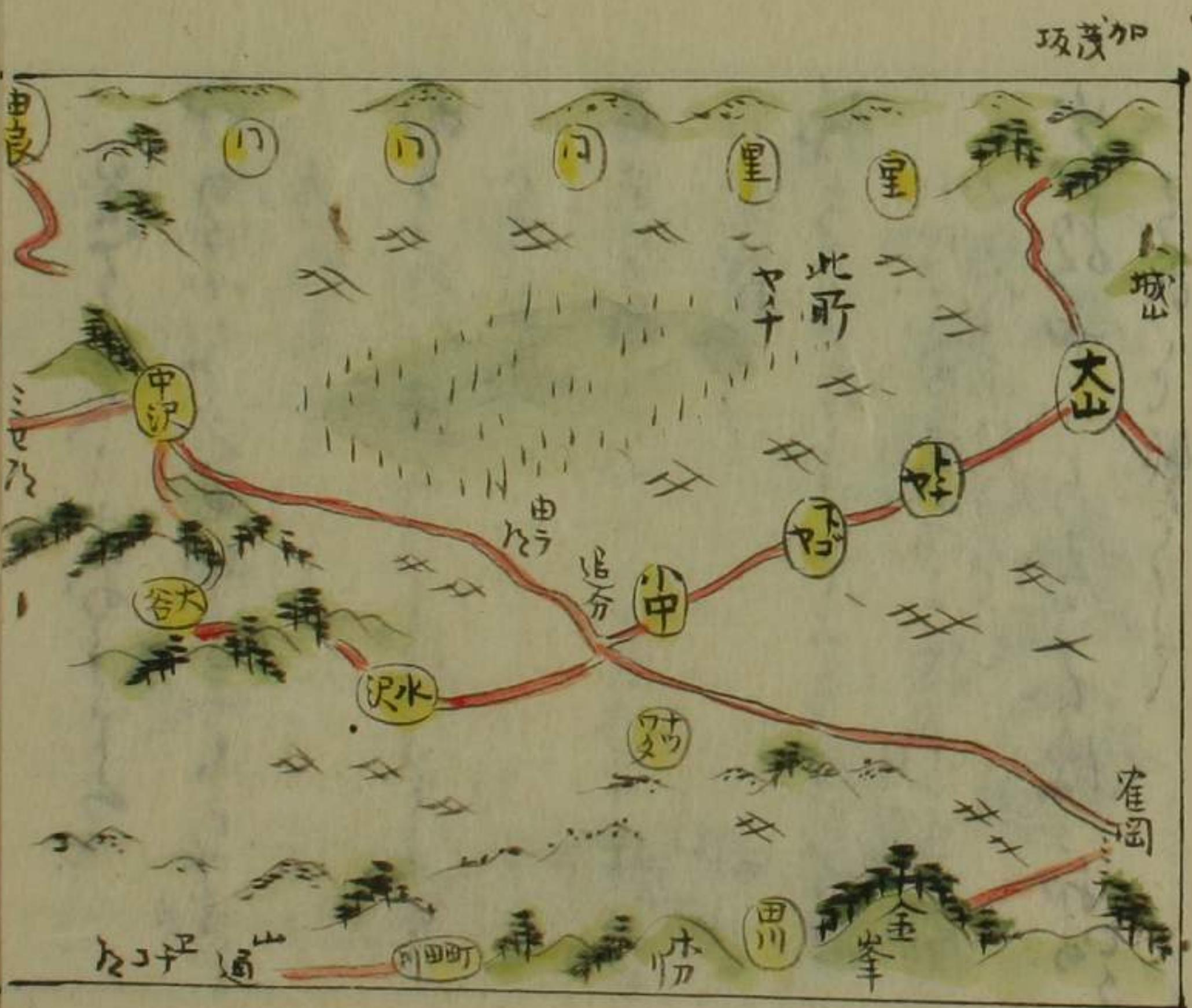
のまくまくとせんせん

とりえ  
ゆくやくめぐらはなはな

平和夏

太山宿今すあ

はくへくは屋と旅のやう  
をひるひる旅とほんりん  
じてあそぶとあそぼ  
酒の酔顔をまへてもかく  
人とゆきとゆきとゆきと  
みゆく  
まよひやくも林をわざめ  
ほどのもよ移ともあじよ  
うむれいとくとくとくとく  
じかくとくとくとくとくと  
あくとくとくとくとくとく



まごのふるみ

印のまこととてあをうら

山のま

のまこととてあをうら

金ア

手のまこととてあをうら

こ風ア

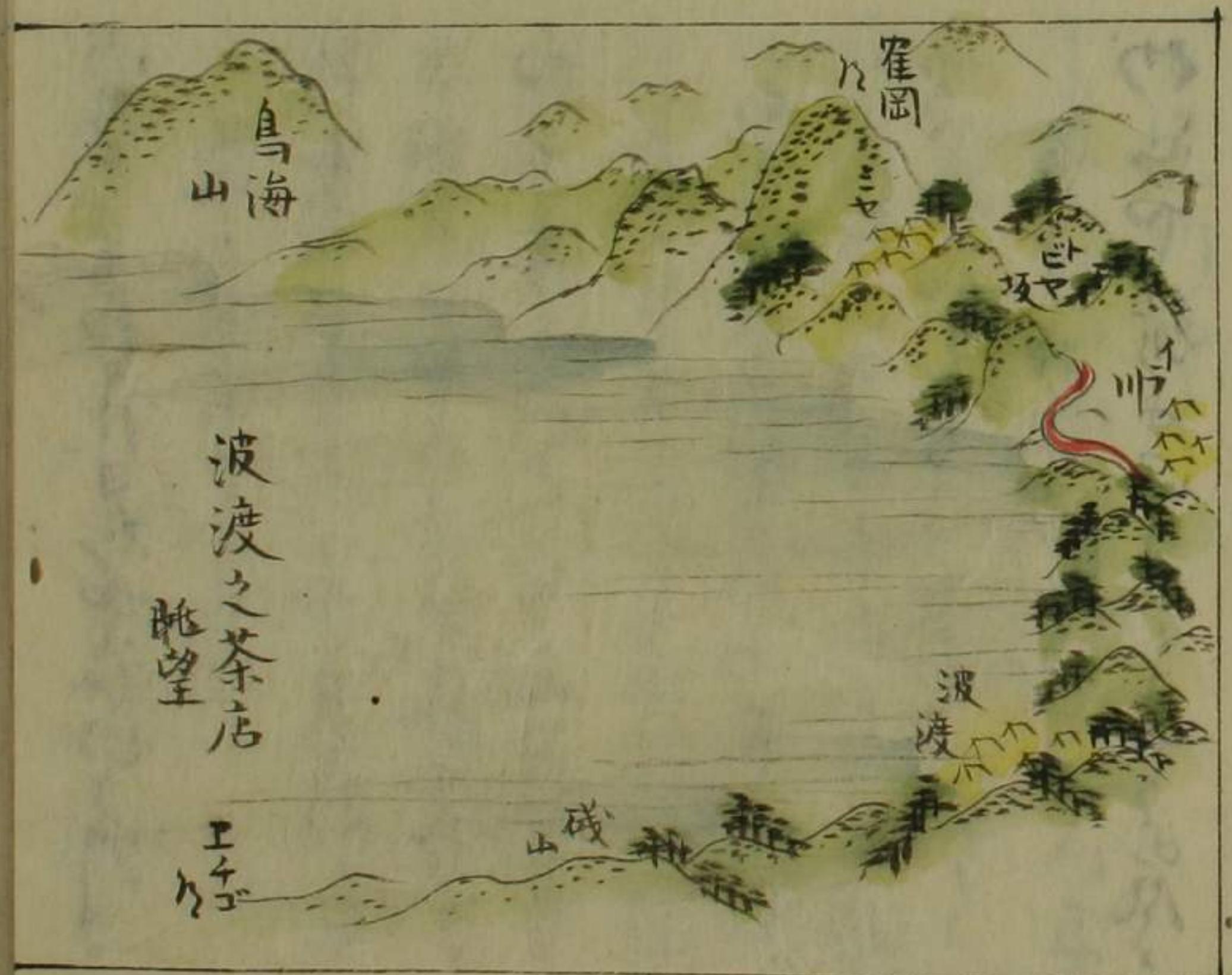
改まこととてあをうら

小波のまこととてあをうら

かねかねかね

おれやくらめくはく

もれとれ



家ちとまや和月日暮や波ひのり

氣す風か

経むやましにうかはせれどす

田中の風はうとうとれどす

かの森小松くさくぬ風か

矢吹川舟うらをか

おとよもじと神の五いが

武都山やか

ちととふじかくであわせ

金や桜の香とく

けじで旅するはうきの風

風川

まかすとゆまよ川のあらは

風

里水とにしてかのの風

口たがやよぬ

絶えや森とくか木の風

金

か月やかのの風よか木の風

うへてとくか木の風よか木の風

かのれあきか

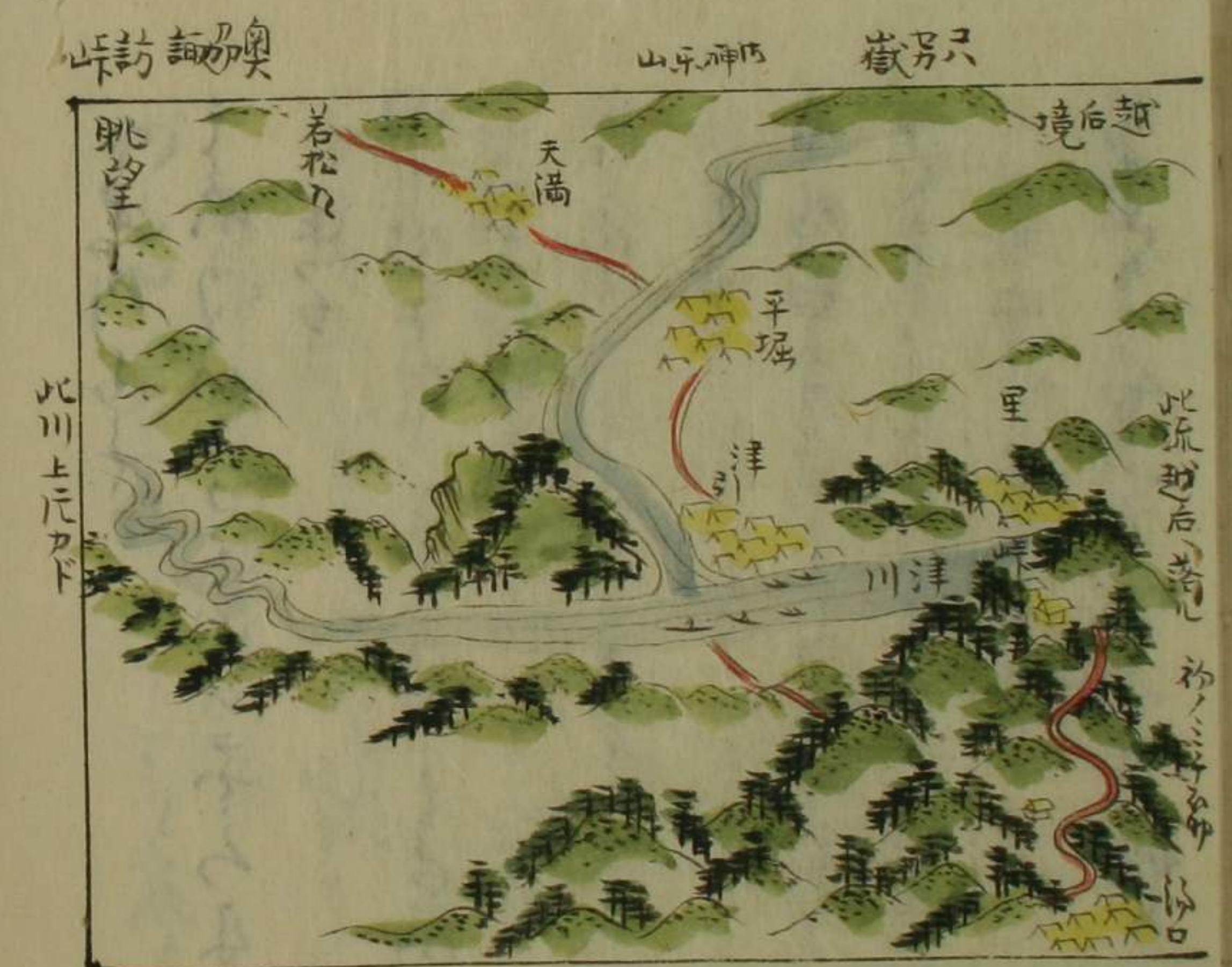
まかすとゆまよ川のあらは

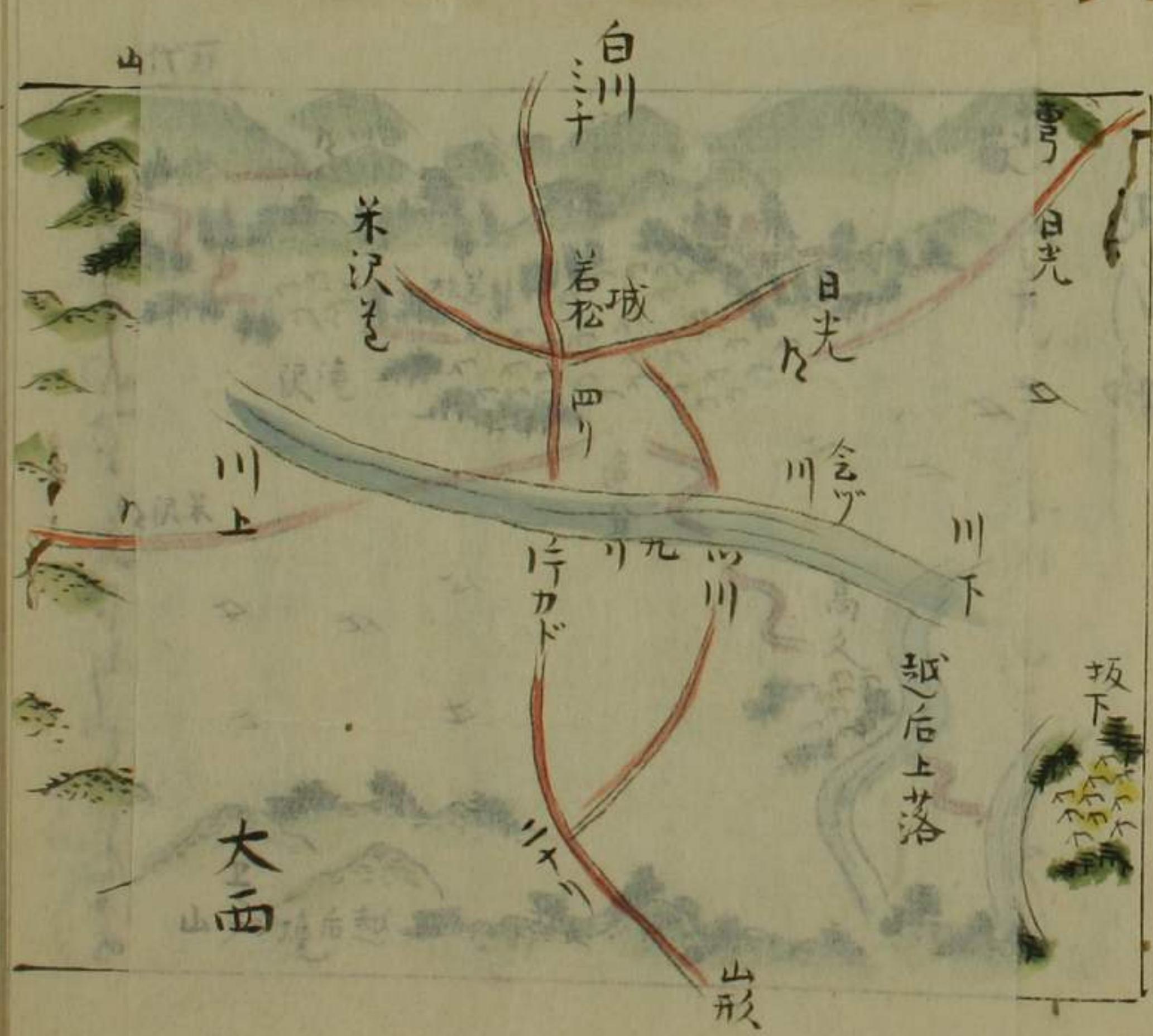
訪訪山中

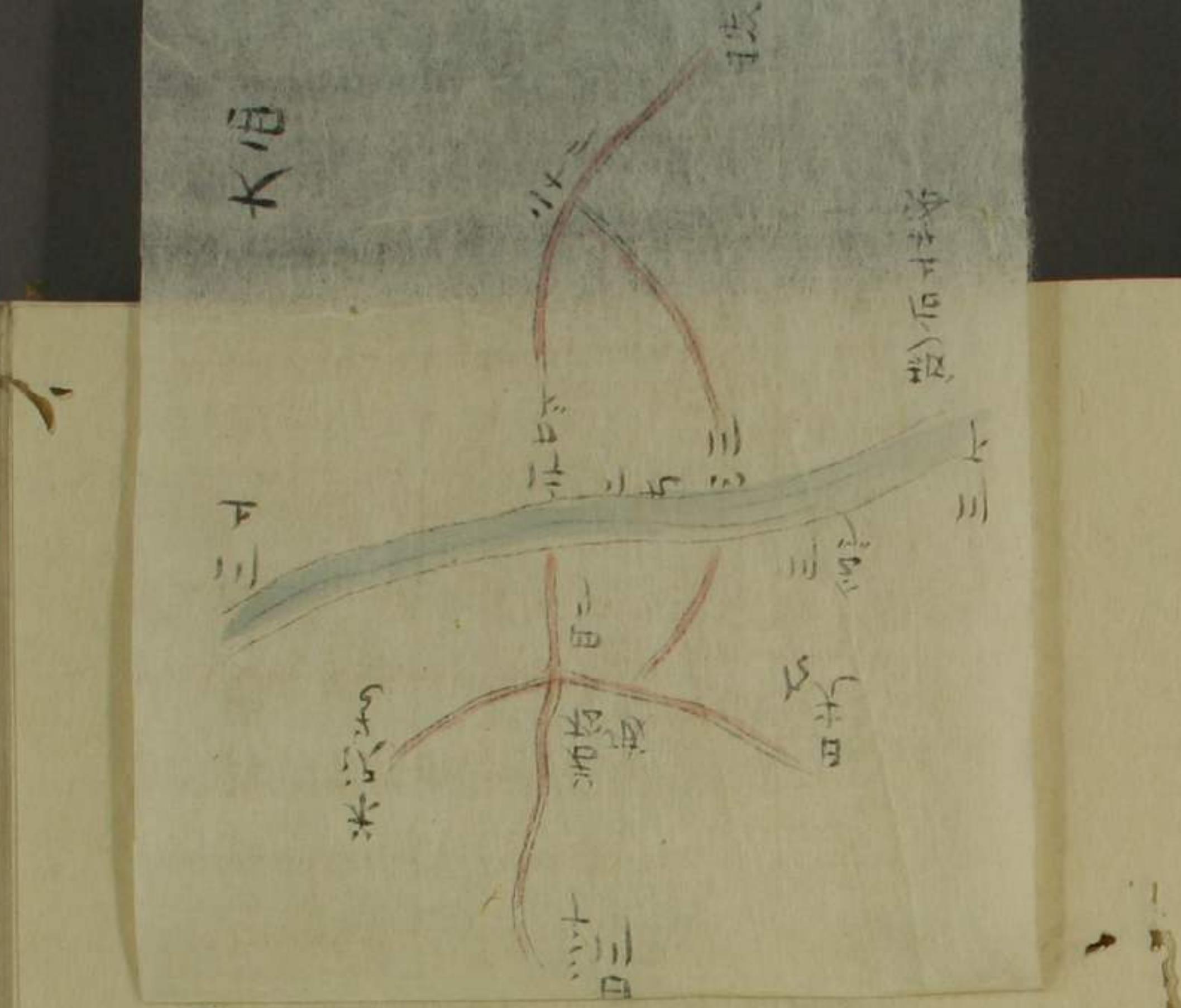
گلستان

元江の名は、俄の名也。

事以之







志士不以爲難，下而得人，則可  
度也。毛遂曰：「臣乃今日知  
天子之聖也！」

元の小限の治の事  
その所とらむ

アラタニシハシマリ

山袖やまの袖  
が入るよ  
さくらの匂  
あらわす  
さくらの匂

卷之六

はやくおひなさんへおひるいり  
おひるいりのうちおひるいり  
おひるいりのうちおひるいり  
おひるいりのうちおひるいり

卷之四

まつめのふるひゆきよしきに  
しらなみの相あつて経へゆく  
様へよしけりをもよそうす  
いつてとまつゆきあはせば

كَلْمَانْ كَلْمَانْ

か夜よやいとく風のやう  
白府姫の流歌がある  
湯川や水川とかすれ都  
やくもやがくもとてゆる  
まゆ水川の神  
まゆやさくらんむかわ下國

卷之三

やのあらえの猿かわく  
よめねね

よおチヤアトモルハ  
モヘタシテムモモセキ

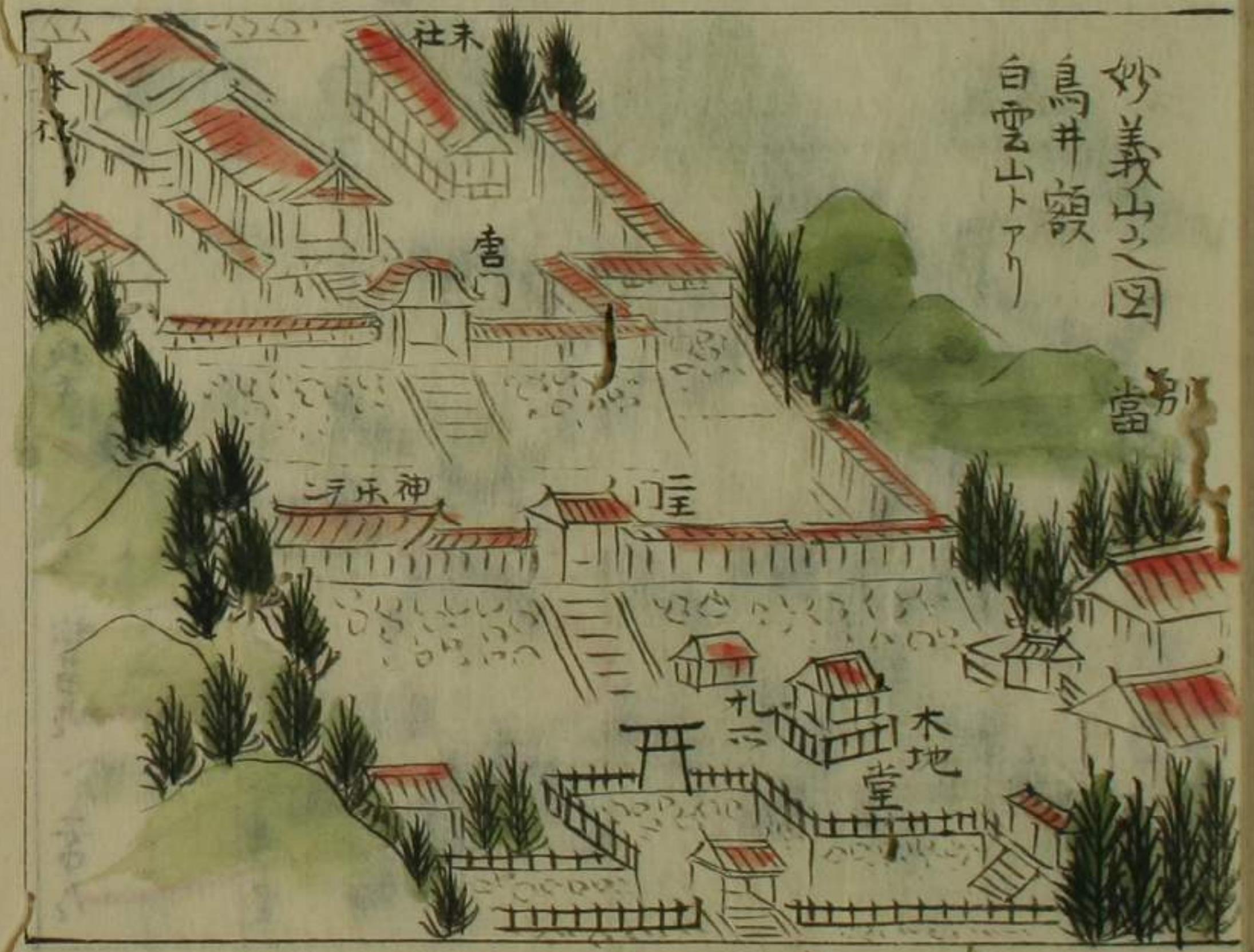
即興  
桶の物、切る  
てやる

蒙古語文書



かくは  
わ秋のうらもかくはの徳能と  
徳之まほをひき、重よゆうするへ  
むほゆうて能ひるゝやしめ能  
ゆくすすわくまほ

妙義山之岡  
鳥井讀  
白雲山トアリ



門表

畠田の仄小泊りて  
セメやゆく後乃ゆす  
わゆ跡を尋  
れやうやうけんしより一ツ先  
はる山のふねとひづれ  
もやの日をかきむらむ  
近所の水すら  
伏れや風土のくずれ



桔梗原や

ゆふるむ四代や弓の廻りてま

あそうや

まよひきくねとよせや弓の弓

麻くくもんや

ゆふらむとよせとよせとねのを

アツ川の了あよんあくくす  
信子江と空とてよ壁あ  
ひくぬよと人のおじるよ  
おののくと教とれとけす  
のくよとくとくとくとくと  
はくくのくとくとくとくと  
くのくとくとくとくとくと  
くのくとくとくとくとくと

ましのとよで暮る  
日はとくに人ひあらひ人の  
匂とくに人ひとくに人ひ

ましのとよで暮る三月と  
か風のとよで暮る三月と  
か國のとよで暮る三月と

か年とよで暮る三月と  
か月とよで暮る三月と  
か年とよで暮る三月と

大井西行隊

内津喜政

余集

奇仙行秋

只深みますとしりて  
宿るかわら菴のくわあ  
魚の日をすまし桂月の  
そら桂の風を追ひあ  
そくの風のまの残す  
桂の香をくわむかわす  
川のふりをよどますよ桂  
いひいへんすすりの香も  
かく西から吹き渡す桂の  
涼すさぬめの桂めに桂と  
うれゆ月五つり  
勤め身もまく桂と

付近の事は如何に思ふ  
か悪かしくおもふ事  
のちの所がどうか  
よくある事

卷之三

月の上に  
雪は  
工部の  
放り下す



石  
之  
橫  
乃  
橫  
於  
舍  
於  
舍

文化九年甲申歲  
己亥年歲  
此年者仙七十歲也

